

碩心

社団法人 日本詩吟学院 岳風会 認可
 神奈川 碩心 会 発行

6年 逗葉大合	5月 地区区計	現在 地区区計	6年 根編中	5月 岸村	(262号) 行者集 岳者愛
182名	213名	42名	437名		
182名	213名	42名	437名		

六月の行事予定

○神奈川地区青少年吟道大会

日時・6月12日(日)

場所・鎌倉中央公民館分館

○碩心会温習会

日時・6月26日(日)

場所・逗子市立図書館ホール

◎指導者吟道講座の御案内

日時・8月7日(日)9時受付

会場・横須賀ベイサイドポケット

京急汐入駅下車徒歩1分

JR横須賀駅より徒歩8分

横須賀芸術劇場となり

参加費・千五百円

(弁当、ウーロン茶、テキスト代)

※当日吟道手帳、筆記用具持参

第一時限：漢詩・一乗寺に遊ぶ(3/26)高橋岳涛

漢詩・甲戌の冬舟中に(4/18)

第二時限：漢詩・月を見て感あり(4/18)佐藤岳昭

和歌・多摩川(4/20)

(昼食休憩)

第三時限：新体詩・秋風の歌(3/18) 覚張岳珠

漢詩・早に白帝城を發す(1/97)

第四時限：短歌・花すすき(3/56) 鈴木岳秋

俳句・旅に病んで

第五時限：〃・とんぼつり

〃・七夕の

第六時限：朗詠について 長谷川岳聖

師範認許

(六年二月六日付)

杉山雪岳

沼田義岳

上村象岳

渡辺誠岳

木村松岳

準師範認許

(六年四月一日付)

笠原珠岳

網川晃岳

加藤朋岳

磯村朋岳

光岡洗岳

三壁照岳

森 晴風

菊池祐風

星野輝風

一柳良風

広瀬晴風

村井知風

皆伝認許

(六年五月一日付)

高橋華岳

野田公岳

松川好岳

水上昌岳

森 晴岳

角田梅岳

おめでとうございます。

全国吟道大会

高令者表彰を受けて

山の根支部長 栗原丈風

〃初明り齡九十赤頭巾〃

第104回全国吟道大会に於いてこの度、高令者表彰を受け感謝しております。私が吟の道に入ったのは昭和47年5月1日、三井先生の御指導を受け、今日に至っております。そして今日まで生きられたという事は、偏に吟道のお陰と、三井先生はじめ、根岸会長その他諸先生の御指導の賜と感謝しております。奇しくも、千葉先生との関係は、終戦後、ソ聯での抑留生活に始まり、五年間極寒と、粗食に耐えてきた当時を想い、感無量のものがあります。

吟道精神にある「人の生や気なり。氣竭くれば死す。氣は以て養わざるべからず」その一言にあると思います。

内閣総理大臣主催

「桜をみる会」に招待され感あり

又私は去る4月20日、新宿御苑に於いて行

なわれた「桜をみる会」(八重桜500本満開)

に家内同伴、招待の榮に浴し行つて参りました。当日は無風温暖の花見日和に恵まれ、参加者は七千百名と報道され、頗る盛況でした。

参列者は日本と友好関係のある大使、公使、政財界、芸能人等にて、民族衣裳華やかなの感あり。頗る友好的で、握手を求められカメラに納まる等、世界は一つ、人類は兄弟の感あり。何故戦争が起るのか不思議に思われた。

〃欲ばるな仲良く暮らせ人の世の中〃

※この記事を書き写しながら私は感動しました。電話で生年月日をお聞きしましたら、明治37年3月6日。そしてそのお声の若さに又々びつくり。いつまでも奥様共々益々お元気でいられることを祈ります。

師範位の受審にあたり寸感

松和 木村 松岳

この度根岸会長より、師範を受けてみないかと突然云われ、狐につままれたような驚きを感じ、暫く呆然としてお答えする言葉もありませんでした。昭和56年、三井先生のお奨めにより、準師範の認許をいただきました。

(当時、自分は吟は上手な方かなーと自惚れていた)。多少なりと優越感を持っていた。その時点では吟歴は僅か十年にも足らず、今にして思えば汗顔の至り：おおいに反省しております。二十余年を過ぎ、改めて詩吟の難かしさを感じ、(主として発声法)吟力のない事を悔んでいた時に、根岸先生からのお奨めで、只々恐縮している次第です。

吟道四月号に「あがる」ということが書かれています。或る詩吟の先生のお説によると、勝負で、興奮しやすく、周囲に氣を使う神経質な人が「あがりやすい」ということだそうです。平常心が一番よく、トローチや、クル飴はノドの乾きの迎え水にはならないということだそうです。

「うぬぼれとかさ気のないものはない」といわれますが、自分を実力以上に買いかぶり、それを人に聞かせようとして失敗する。自分は「逆説療法」ということもよいのではないか：自分はあまり上手ではないと思つている人に暗示を与えますと、俺は上手な方なのか、知らず知らずのうちにその氣になり、自信がわいてくる。これは誰にでもよいということにはならない。「人をみて法を説け」

と申しますように、顔が変れば体型も変わるから、この点誤解のないように。

で参考のために、温習会の状況等を説明いたします。詩吟は絶句一題ですと、二分以内で吟じます。壇上には吟者の他に四、五名が控えて順番を待っています。その間前述のようにノドがかわき、会場を見渡して興奮がはじまります。前の吟者の声の高さが自分と同じくらいなら耳ざわりになりませんが、自分の「話声」で吟じ始まるのが基本ですが、緊張すると「出だしの声」が高くなりがちで、とてつもない高声で始まり、失敗することが度々あります。「我こそは最高の吟者である」と思いこみ、自分のペースを守るよう心掛けて下さい。

幸い松和支部には加藤先生（内科）と、宇都宮先生がいられ、それぞれの得意分野のお話を、微に入り、細に亘り、丁寧に説明をいただき、支部会員スタッフの充実振りを誇りに思っております。これからも益々吟力のアップにつとめ、皆様方のご期待にそうよう頑張りますので、よろしく御指導の程お願い申し上げます。

九段の審査を終えて

逗子B 平山 祥岳

二月十三日の高段者審査の日も近づいて、一生懸命勉強してきましたが、胸がドキドキして早く済ませたいな一と思っていました。そしていよいよその日が来て、高橋桜岳さんが、私も受けるから一緒に連れて行ってあげますよと励まして下さったので助かりました。おかげ様でこの年令（86才）で受けることができ、大変嬉しく思っております。

三年程前の三月二十三日、その日は大雨で、足をぬらしたため、歩行困難になり、二ヵ月程立つこともできず、家の中を這っておりました。もうこれでは詩吟もだめだと思い、やめるつもりでおりましたところ、ある方が、玄米のスープがいいですよと申され、早速作って頂きましたら、立上ることができ、かうじて歩けるようにもなりました。でもこんな状態では、吟はとも続けれられないと思い、三ヵ月分のお月謝を持っていこうと、まず神様にお礼を申し上げて一吟吟じてからと思いい、心をこめて吟じましたところ、不思議にも体がシャーンとして、とても足が軽くなりました。

ああこれでは吟をやめる事はできない。吟道精神の中にもあるように「吟じ終りて清風起る」の心地で、あー吟はいいな一、やめられない、更に前進しようと思いたしました。そして今回九段を受けることができました。こんな嬉しいことはありません。皆様のおかげ様と感謝しております。これからもよろしくお願いいたします。

詩吟をはじめ

吟秀 佐野 ミサ子

ある日、葉山清寿苑でお年寄りの誕生会がひらかれた時のことです。加藤（芳風）施設長より、お祝いとして和歌のご披露がありました。

親思ふ心にまさる親ごころ

今日のおとづれ何と聞くらむ

施設長の和歌に聞き入っていた同席のお年寄りの中には、目頭を熱くしている方もおりました。そしてこれがきっかけで、後にデイサービスの利用者と共に、詩吟クラブが生まれました。毎週金曜日には、デイサービスのフロアーに吟ずる声が響きわたります。昨年十月、施設長のお声がかりで、私も詩

吟のお稽古をさせていただくことになりました。加藤岳相先生によるご指導のもと、おかげ様で初段の合格をいただくことができました。発声法の訓練や、歴史の勉強になるのはと、自分なりに考えています。今は無我夢中の稽古ですが、味わう詩吟に成長させていただけるよう、夢をもって励んでゆきたいと思っております。

堀内・D 板橋 雅 岳

摘草の吟友の声透く遠岬

さきさかる白蓮空へまつすぐに

風早 後藤 道 岳

芽木の天羅漢つぶやくかと想ふ

朧夜の山のあなたは母の里

堀内・A 石渡 桂 岳

花と蝶良寛遊ぶ白い雲

どの山も新緑深し山頭火

滝の坂 佐久間 爽 岳

天城嶺の水走り出づ花わさび

衍して松山八十八夜かな

唐木山 寺脇 宇 岳

教場の鳥も囀り合吟す

五月来る水底澄みて蟹歩ゆむ

吉野の桜

大船A 山口 夕 岳

念願の吉野の桜をみに、私の教室の有志七人と有明埠頭からサンフラワー号で出発。一夜を船にゆられ明朝紀州へ着いた。生憎の春雨に港はボーツと烟っていたが緑が美しい。案内人の説明をききつつ高野山の墓地へ。

立派な苔むす墓に時代の流れを感じつつ、次の吉野へ。朝方は先の見えぬ程の霧で冷えこんでいたが、陽が昇るにつれて快晴となる。そして高野山では桜の苔が固くて心配していたが、吉野に近くなるにしたがい、山々の桜が美しく目にとびこんできた。

吉野に到着。どの駐車場も観光バスで溢れんばかり。ガイドさんから地図を受取り自由行動に入る。そしてまずは如意輪堂へ。詩吟に関係の深い土地で、芳野三絶、小楠公と吉野は漢詩の舞台である。気温があがつて山路を歩くと暑い位。坂道が多くきつい。後醍醐天皇の御陵の近く如意輪堂は昔のままの姿を止めていた。

かえらじとかねて思へば梓弓

なき数に入る名をぞとどむる

と記した扉は、保護のため、記念館のガラスのケースの中昔のままの木の扉に、わずかに読みとれるだけでした。又記念館の前庭には、頼山陽の「楠公子に別るるの図」の銅像も立っていた。花の中に身をおき、目のあたりに如意輪堂を眺める時、小楠公の結句「君見ずや芳野の廟板」と口ずさまずにはいられなかった。

後醍醐天皇御陵は残念であったが、石段を上る体力がなくなり、記念写真だけ撮ってバスに戻った。忙しい旅ではあったが、吉野の桜にまみえることができ、多分これから吉野に関係のある漢詩に出会った時、私達はこの日の桜を思い浮べることでしょう。

(入 会)

731 白砂照志 逗子市山の根二一六―二六

(堀内・B) 〇四六八―七三―〇五七五

732 岡野和風(再) 逗子市逗子三―三―二六

(真 澄) 〇四六八―七―二七一九

(退 会)

68 小峰智風(勲・C) 74 沼田悦岳(下山口)

148 斉藤秀風(勲・C) 149 関口恵風(勲・C)

218 塚越まさ子(勲・C) 513 鈴木深風(勲・D)